

## 日本におけるベラルーシ語事情 —ベラルーシ文学の邦訳とベラルーシ語教育を中心として—

清沢紫織・臼山利信・ラムザ タッチャーナ

### 1. はじめに

日本におけるベラルーシ<sup>1</sup>に関する学術研究の成果は、その多くが現代ベラルーシの政治・経済に関するもの、あるいはチェルノブイリ原発事故の被害とその影響に関するもので占められている。特に 1986 年 4 月のチェルノブイリ原発事故の悲劇は、日本人の多くにとってベラルーシという国を知る「きっかけ」の役割を果たしてきたと言っても過言ではないだろう。しかし、1991 年 12 月のソ連邦崩壊に伴ってベラルーシ共和国が独立を果たして以降は、ベラルーシの言語や文化が日本の言語学研究者及び文学研究者からも関心を集めるようになってきており、近年では文学作品のベラルーシ語からの直接翻訳や外国語としてのベラルーシ語の学習活動を行う取り組みも現れ始めている。本稿ではそうした日本におけるベラルーシ語とベラルーシ文学をめぐる最新の状況を整理する。またソ連邦崩壊後の、日本社会におけるベラルーシへの関心が相対的に高まりに呼応する形で生まれた、大学などにおける日本のベラルーシ語教育の現状などについて検討・考察する。

### 2. ベラルーシ人作家による作品の日本語翻訳について

日本において最初にベラルーシ語やベラルーシ文学に関する言及がなされたのはいつかを正確に述べることは難しい。しかし、ベラルーシ文学に関しては、1932 年にロシア語からの翻訳書として出版された『サヴェート文学叢書第 1 輯』中に既に「白ロシアの文学」という章がみられ、確認できる限り、これが日本において最初にベラルーシ文学について触れた解説である[木岡 1932: 141-149]。同様のベラルーシ文学に関する概説的な情報は、日本において出版されたソヴィエト文学に関する幾つかの文献の中に見ることができる[セヴェリン, トリフォノフ 1934, 尾瀬 1949, 除村 1952]。これらの文献

---

<sup>1</sup> 黒田が指摘するように、日本ではベラルーシのことをかつて「白(ハク/シロ)ロシア」「白(ハク/シロ)ロシヤ」「ベロロシア」「ベロルシア」など様々に呼んできたが、1991 年 9 月に本国が正式に国名を変更したのに伴い、日本の新聞やマスコミ等では「ベラルーシ」という呼称が定着している[黒田 1997:41-42]。よって、本稿でも引用箇所などを除き国名は「ベラルーシ」で統一する。

の中でも、1952年に出版された『ソヴェト文學史 III』の中の「白ロシアの詩人ヤンカ・クパーラ」という章には、その本文中に20世紀ベラルーシ文学の作家の中でも最も代表的な一人であるヤンカ・クパーラ(Янка Купала)の詩「あそこに行くのは誰か」(А хто там ідзе?)が全訳されて引用されており、注目される[除村 1952: 920-921]。これは、管見の限りでは、ベラルーシ人作家の作品の最も古い日本語翻訳である<sup>2</sup>。

このように日本においてベラルーシ文学は、ソ連時代には主にソヴィエト文学の一部として位置付けられてきた。しかし、ソ連崩壊後はソヴィエト文学としてではなく、しばしば東欧文学の地域的なジャンルとして紹介されている<sup>3</sup>。これまで詩や短編・中編小説を中心として、ベラルーシ人作家の作品も一定数が日本語に翻訳されてきている。2016年12月現在では、以下の表1に示す作品が日本語に翻訳されていることがわかっている<sup>4</sup>。

表1 ベラルーシ人作家の作品の日本語翻訳一覧 (2016年12月現在)

著者 <sup>5</sup>	作品名 <sup>6</sup>	翻訳者	翻訳年
アレシ・アダモヴィチ (Алесь Адамовіч; 1924~1994)	「ドキュメント 封鎖・飢餓・人間 — 1941→1944年のレニングラード」 (Блокадная книга; 1977~1981) <sup>7</sup>	宮下トモ子他	1986 (1982 <sup>8</sup> )
アンドレイ・フェダレンカ (Андрэй Федарэнка; 1964~)	「ブリヤハ」(Бляха; 1994)	越野剛	2011

<sup>2</sup> ただし、この翻訳はこの章内の「ヤンカ・クパーラにたいするゴーリキーの評価」という節内でマクシム・ゴーリキーによる同詩のロシア語訳を紹介する文脈で引用されたものの日本語訳である。すなわち、この日本語訳は明らかにこのゴーリキーによるロシア語訳からの重訳である。

<sup>3</sup> 例えば『ポケットのなかの東欧文学:ルネッサンスから現代まで』(成文社、2007年)や『時間はだれも待ってくれない:21世紀東欧 SF ファンタスチカ傑作集』(東京創元社、2011年)といった東欧文学を扱った作品集にベラルーシ文学の作品が収められている(具体的な作品については表1及び参考文献欄を参照)。

<sup>4</sup> その一部についてはキёサバ(2012)においてベラルーシ本国で既に紹介済みである。

<sup>5</sup> 日本語表記は原則ベラルーシ語表記に基づき、括弧内に原語表記及び生没年を示す。一部、執筆言語をロシア語とする作家の名は原語表記はロシア語、日本語表記もロシア語表記に基づいている。

<sup>6</sup> 括弧内に作品名の原語表記及び発表年を示す。

<sup>7</sup> 本作品は、ロシア人作家ダニール・グラニン(Даниил Гранин; 1919~)との共著である。

<sup>8</sup> この作品の翻訳は、中田甫の翻訳により抜粋という形で「封鎖の書からの諸章」という邦訳タイトルの元に1982年に雑誌『ソヴェト文学』第79号に発表されたのが初出である[アダモヴィチ 1982]。その後、1986年に宮下トモ子らによって全訳され2巻本として改めて出版された。

アルカジイ・クリヤショウ (Аркадзь Куляшоў;1914~1978)	「青年の日から」(3 юнацтва* <sup>9</sup> ), 「きみとぼく」(Ты і я;1950), 「詩に一言する」(Да паэзіі;1960) 他三篇(無題)	村井隆之	1966
	「最前線で」(На фронце*), 「私の証言」(Маё пасведчанне;1951) 他四篇(無題)	村井隆之	1970
	「子孫との対話」(Размова з патомкамі;1952)	赤松徳治	1977
ヴァシーリ・ブイカウ (Васіль Быкаў;1924~2003)	「死者に痛みはない」(Мёртвым не баліць;1965)	水野忠夫	1967
	「湖で」(На возеры;1957)	御子柴道夫	1969
	「敵との一夜」(Адна ноч;1961)	酒枝英志	1975
	「狼の群」(Воўчая згряя;1975)	草鹿外吉	1979 (1978 <sup>10</sup> )
「最後の手榴弾」(Последняя граната;1972)	岡林菜萁	1985	
	エレーナ・ポポワ(Елена Попова; 1947~)	「女流詩人の為に夫が必要です」(Нужен муж для поэтессы;1986~1987)	古澤晃
イヴァン・シャミヤーキン (Іван Шамякін;1921~2004)	「女教師の子供たち」(Дзеці настаўніцы;1960)	松本忠司	1969
	「パン」(Хлеб;1969)	箕浦達二	1982
マクシム・バフダノヴィチ (Максім Багдановіч; 1891~1917)	「明星が天に昇って...」(«Зорка Венера ўзышла над зямлёю...» (Раманс);1912)	柴田賢	2016
	「皐月の歌」(Маёвая песня;1910)	柴田賢	2016
マクシム・タンク(Максім Танк;1912~1995)	「古い家のガラス」(Шкло старой хаты*), 「ああ、お前の返事は」(Адказ на пісьмо;1962) 他六篇(無題)	村井隆之	1966
	「忘れないでくれ」(Не забывай;1934)	稲田定雄	1975
	「旅の前」(Перад вандроўкай;1967), 「わが町の舗装道路の石」(Камень з бруку нашага горада <sup>11</sup> ), 「チリーの白樺」(Чылійская бярозка <sup>12</sup> ) 他八篇(無題)	村井隆之	1979

<sup>9</sup> 原題不明の為、直訳を暫定で付す。以下同様に原題不明のものはアスタリスクをつけて示す。

<sup>10</sup> 本作品の翻訳は、1978年に雑誌『ソヴェート文学』に2号に分けて掲載されたのが初出である[ブイコフ1978a, b]。その後、翌1979年に一冊の本として改めて出版された。

<sup>11</sup> 発行年は未確認。

<sup>12</sup> 発行年は未確認。

ミハシ・リニコウ(Міхась Лынькоў;1899~1975)	「エウセイぢいさんとパラシカ」(Дзед Аўсей і Палашка;1943)	春田国男	1969
ピヤトルーシ・ブロウカ (Пятрусь Броўка; 1905~1980)	「奇しき橋」(Чудесный мост <sup>13</sup> )	稲田定雄	1977
リホール・バラドゥーリン (Рыгор Барадулін;1935~2014)	「クストウイ」(Ксты;2006) (同詩集より詩 51 編の抜粋)	越野 剛	2007
	「在れ！」(Быць!;2006) (同詩集より詩 10 編の抜粋)	越野 剛	2007
スヴェトラーナ・アレクシ エ ヴ ィ チ (Светлана Алексиевич;1948~)	「アフガン帰還兵の証言:封印された真 実」(Цинковые мальчики;1989)	三浦みどり	1995
	「チェルノブイリの祈り」 (Чернобыльская молитва. Хроника будущего;1997)	松本妙子	1998
	「ボタン穴から見た戦争:白ロシアの子供 たちの証言」 (Последние свидетели;1985)	三浦みどり	2000
	「死に魅入られた人びと—ソ連崩壊と自 殺者の記録」(Зачарованные смертью;1993)	松本妙子	2005
	「戦争は女の顔をしていない」(У войны не женское лицо;1983)	三浦みどり	2008
	「セカンドハンドの時代:「赤い国」を生 きた人々」(Время секунд хэнд;2013)	松本妙子	2016
ウラジミル・カратケヴィチ (Уладзімір Караткевіч; 1930~1984)	「紺青と黄金の一日」(Блакiт i золата дня;1960)	越野 剛	2007
ヤンカ・ブルイリ(Янка Брыль;1917~2006)	「人気なき夜半に」(Апоўначы;1946)	佐藤貞雄	1969
ヤンカ・クパーラ(Янка Купала;1882~1942)	「あそこに行くのは誰か;1907」(А хто там ідзе?)	除村吉太郎	1952
	「何者だ、そこに行くのは?」(А хто там ідзе? <sup>14</sup> ;1907)	北御門二郎	1983

特筆すべきことは、ソ連邦崩壊後から現在に至る 25 年間に、アンドレイ・フェダレンカ (1964~)、エレナ・ポポワ (1947~)、マクシム・バフダノヴィチ (1891~1917)、リホール・バラドゥーリン (1935~2014)、スヴェトラーナ・アレクシエヴィチ (1948~)、ウラジミ

<sup>13</sup> 発行年は未確認。なおここには翻訳の掲載された『ソヴェート文学』誌上に記載されていたロシア語タイトルを付す。本作品はオリジナルがベラルーシ語であった可能性もあるものの、不明である。

<sup>14</sup> 本作品の日本語翻訳は 1952 年に既に日本において出版されているが、1983 年にベラルーシで出版された同作品の各国語訳集の中にも収められている(詳しくは Киёсава (2012)も参照)。

ル・カラトケヴィチ(1930~1984)と6人の作家たち作品が短編小説、詩、戯曲、ドキュメンタリー作品と多岐にわたって計72点が邦訳されたが、いずれの作家もソ連邦崩壊後に初めて邦訳されたという点である。ベラルーシが独立を果たし、ソ連邦という古い枠組みでなく、ベラルーシという新しい枠組みの中で全く新しい顔ぶれの作家の作品が邦訳された様子が伺われる。

表1に挙げた日本語翻訳の中で日本において最も広く読まれているものは、恐らく、2015年にノーベル文学賞を受賞したスヴェトラナ・アレクシエヴィチの一連の作品であろう。彼女の主要作品は、これまでにほぼ全てが日本語に翻訳されている。また彼女自身も2003年と2016年に来日し講演や原発施設の視察などを行っていることから日本と関わりの深いベラルーシの作家の1人と言えるだろう<sup>15</sup>。アレクシエヴィチの作品以外では、ヴァシーリ・ブイコフ<sup>16</sup>の作品が、日本においては、特にソ連時代に大きな関心を集めてきた。作家ブイコフについては作品の翻訳のみならず、中編小説「死者に痛みはない」(Мёртвым не баліць)及び「狼の群」(Воўчая зграя)についての書評[江川1968, 飯田1979]、更には彼の創作活動と作品に関する回想及びインタビューの翻訳が文学専門誌で紹介されていることからこれは明らかであると言えるだろう[ブイコフ1965, ラーザレフ1978, ラーザレフ1985]。

以上に見てきたように、日本語訳されているベラルーシ人作家の作品は決して少なくはない。ただし、一つ指摘できるとすれば、表1にあげたもののうち原作がベラルーシ語で書かれた作品の日本語訳の多くは、ロシア語からの重訳であると考えられる点であろう<sup>17</sup>。ベラルーシ語から直接翻訳されたことが確かであるものは、筆者の知る限り、日本におけるベラルーシ文学研究の第一人者である越野剛氏(北海道大学准教授)により翻訳されたりホール・バラドゥーリン、ウラジミール・カラトケヴィチ、アンドレイ・フェダレンカの作品及び早稲田大学大学院修士課程にてベラルーシ文学の研究を行なっている柴田賢氏の翻訳によるマクシム・バフダノヴィチの作品のみである。まだ数は多くないものの、近年になってこうしたベラルーシ語から日本語へ直接翻訳された作品が出版されるようになってきたこと自体が非常に大きな変化であると言える。

<sup>15</sup> 2016年の来日の際は東京外国語大学より名誉博士号を授与されたことでも話題となった。

<sup>16</sup> ロシア語風の表記では「ヴァシーリ・ブイコフ」ないし「ワシーリ・ブイコフ」。

<sup>17</sup> ソ連時代に翻訳された作品は、翻訳の元となった底本についての情報がみられず詳細は不明ではあるものの、翻訳者がいずれもロシア語作品の翻訳で名を知られる人物ばかりであることを考慮するとロシア語からの重訳と考えるのが自然であろう。

### 3. 日本におけるベラルーシ語学習教材について

日本においては、先に言及した越野氏や柴田氏といった文学研究者の他に、言語学分野の専門家の中にもベラルーシ語の知識を生かし、研究・執筆活動を行なっている専門家がいる。日本人によるベラルーシ語学習に関しては、ベラルーシ本国においてもこれまで度々注目されてきた。一例をあげると、1993年には現地ナロードナヤ・ガゼータ紙に「よもや日本人の方が我々よりベラルーシ語に精通するようになるのか？」(Няўжо японцы будуць ведаць лепш беларускую мову, чым мы?)と、やや皮肉めいた見出しの記事が掲載された[Навойчык 1993:2]。同記事は、1993年にミンスクで開催されたベラルーシ語サマースクール<sup>18</sup>に日本よりスラヴ研究者の黒田龍之助氏が参加したことに関連して書かれたものである。黒田氏はこの2年後の1995年に「日本人の見たベラルーシ:歴史的概観の試み」(Беларусь вачыма японцаў: Спроба гістарычнага агляду)と題した報告を発表し<sup>19</sup>、その中で当時の日本におけるベラルーシ研究の状況について紹介し、急務の課題として「ベラルーシ語の教科書、語彙集の編纂とクパーラ、コーラス<sup>20</sup>をはじめとする主要な作家の作品を翻訳すること」を挙げている[Куроода 1995:97, 黒田 1997:47]。

その後、語彙集に関しては黒田氏自ら1998年に大学書林より『ベラルーシ語基礎1500語』を出版した。同書は『ベラルーシ語基礎1500語』と題されているものの、実際にはベラルーシ語・日本語の対訳語彙集の他にも、ベラルーシ語の音声と文法に関する概説、ベラルーシ語のロシア語との発音・綴字・文法の主要な違いについての解説、いくつかのテーマ別の語彙集といった多岐にわたる内容が収められており、この点は現

---

<sup>18</sup> 国際ベラルーシ語サマースクールは1991年よりベラルーシにおいて始まった取り組みで、ベラルーシ国立大学文学部准教授(当時)のウラジミール・ナヴモヴィチ(Уладзімір Навумовіч)氏がオーガナイザーを務め1991年、1992年、1993年の3回に渡り修了生を輩出した。その後数年の休止が続いたが、1999年に、ベラルーシ国立大学文学部准教授(当時)のリジヤ・シャメシュカ(Лідзія Сямешка)氏が新たにオーガナイザーを務め、同学部を主催として「ベラルーシ語・ベラルーシ文化サマースクール」という名称で活動を再編して実施、1999年、2000年の2回に渡り修了生を輩出した。2001～2014年は再び活動を休止していたが、2015年夏にリジヤ・シャメシュカ(Лідзія Сямешка)氏が再びオーガナイザーを務め、主催を共和国高等学院に変更し、ベラルーシ国立大学文学部からの直接の協力体制のもとで活動再開を果たした。続く2016年夏にも開催され、ヨーロッパやアジアからの参加者を修了生として輩出した。

<sup>19</sup> 同報告は日本語翻訳されて1997年に日本においても出版されている[黒田 1997]。

<sup>20</sup> ヤクブ・コーラス(Якуб Колас; 1882～1956)は、先述のヤンカ・クパーラと並ぶ、20世紀のベラルーシ文学の作家の中でも最も代表的な一人である。

地のベラルーシ語学者による本書書評の中でも高く評価されている[Мячкоўская 1999: 217]。

また語彙集の他には、文法書として、1996年に神戸大学、神戸市外国語大学、京都産業大学、京都大学に所属するスラヴ語研究者よりなる研究グループによって『現代ベラルーシ語対照文法』が出版されている。これは、今日に至るまで日本における最も詳細かつ専門的な現代ベラルーシ語の文法書として位置付けられる [Киёсава 2016]。

それから20年後の2016年初めには、「日本語で書かれた本邦初の本格的なベラルーシ語入門書」[白山 2016:ii]として筑波大学グローバルコミュニケーション教育センターより『Спрабуйма!: 日本人のためのベラルーシ語入門 I』が出版された<sup>21</sup>。当該教科書の執筆は、ベラルーシ国立大学文学部教授のタッチャーナ・ラムザと筑波大学大学院生の清沢紫織が共同で行い、監修を筑波大学人文社会系教授の白山利信が務めた<sup>22</sup>。同書の出版はベラルーシ本国の数々のメディアで取り上げられ大きな話題となった<sup>23</sup>。

同書の基礎となったのは、2015年度に筑波大学人文学類にて学部生向けにベラルーシ語入門の授業として開講された専門科目「スラヴの言語と文化」のために作成された教材である。そのため、同書の対象として想定されているのは授業の実際の履修者であった、キリル文字が読め基礎的なロシア語の知識を身につけた学生であり、教科書の内容自体も基本的な文法事項に特化している。また、ロシア語の知識をある程度前提としているため、音声、文法、語彙をはじめとするベラルーシ語の諸特徴は特にロシア語との比較を念頭に説明されている。また、学習内容の整理ために本書には巻末資料として品詞別の文法表(動詞の変化、名詞・形容詞・代名詞の格変化など)、および日本語・ベラルーシ語・ロシア語による三言語対訳の文法用語一覧を付した。いずれも教科書の本課内で扱った内容を上回るものとなっているが、これは、学習者の自主

<sup>21</sup> タイトルの *Спрабуйма!*は動詞 *спрабаваць*(試してみる)の一人称複数命令形で、*Let's try!*や *Try it!*といった意味である。なお、同書は2008年にベラルーシにおいて採択された最新のベラルーシ語正書法に準拠してつくられた本邦初のベラルーシ語教材でもある。

<sup>22</sup> 執筆者の1人である清沢は、2012年初めに筑波大学とベラルーシ国立大学の間で締結された全学学術協定に基づき、2012年6月から約1年間ベラルーシ国立大学文学部に派遣交換留学し現地で直接ベラルーシ語を習得した。即ち、本書は筑波大学とベラルーシ国立大学の間で締結された協定の実現によってもたらされた学術成果の1つである。

<sup>23</sup> 国営ベルタ通信をはじめ、*Звязда* 紙、*Літаратура і мацтацтва* 紙、*Настаўніцкая газета* 紙、*Беларусь сёння* 紙、国営TVチャンネルのベラルーシ1、СТВなどで取り上げられた。また非国営のベラルーシ語メディア大手であるベラルーシ語版ラジオ・リパティエー、*Наша Ніва* 紙、衛星TVチャンネル *Belsat*、ニュースサイト *Белпан*、*TUT.by*の多くは国営メディアに先んじて本教材の出版を報じた。各サイトでの該当記事のリンクは本稿の末の「関連報道」にまとめる。

的なベラルーシ語習得を支援するために加えられた資料である。またこの他にも、日本語で読めるベラルーシ語に関する参考文献のリストも巻末に載せている。

以上が、日本におけるベラルーシ語の主要な学習教材である。この他にも、日本ではベラルーシ語という言語そのものを概説した文献がいくつかあり、中でも代表的なものとして大平(1992)、佐藤(1993)、佐藤(2004)、佐藤(2009)、佐藤(2010)、三谷(2011)などがある。これらは直接にベラルーシ語学習の教材として活用することが想定されたものでないが、ベラルーシ語そのものを深く知る上で貴重な情報源であると言える。

#### 4. 大学におけるベラルーシ語教育について

ベラルーシ語の学習教材が編纂・出版されるのと相まって、近年、大学の語学講座としてベラルーシ語教育を行う試みが見られるようになってきている。

ベラルーシ語の授業が初めて日本の大学で実施されたのは2011年、東京外国語大学においてである。授業を担当したのは先に紹介した『ベラルーシ語基礎 1500語』を執筆した黒田龍之助氏である。このベラルーシ語の授業はロシア語、ポーランド語、あるいは他のヨーロッパの言語を専攻する学生たちが13名ほど履修したという<sup>24</sup>。講義は、一学期間のみ開講の限られたものであったため、現在、東京外国語大学ではベラルーシ語は科目として開講されていないものの、この試みは日本の大学におけるベラルーシ語教育の先駆けとして重要な意義を持ったと言えるだろう。

東京外国語大学に続き、2015年度(2015年4月～2016年2月)には、筑波大学人文・文化学群人文学類における「スラヴの言語と文化」という通年科目においてベラルーシ語の授業が実施された。授業運営は、担当教員の臼山と大学院生でティーチングフェローの清沢が共同で行った。当該授業にはロシア語既習者の学生が6名ほど参加した。入門・初級レベルの授業であったが、時には語学教材から離れて、ベラルーシ本国の最新のニュース報道・新聞記事、YouTube 動画、映画なども活用し、生のベラルーシ語に可能な限り多く触れる機会を設け、ベラルーシのレアリアの理解の深化にできるだけ配慮した。

講義は2015年度のみ開講ではあったものの、国内ではまだ学習機会のほとんどない東スラヴ語の一つであるベラルーシ語を取り上げ、大学における正規科目において1年間にわたり学習の取り組みを実施したこと、及び講義用に作成した教材を最終的に教科書の形で刊行するに至ったことの意義は極めて大きいと言える。

---

<sup>24</sup> 黒田龍之介氏のご教授による。



## 5. 社会人向けのベラルーシ語教育について

更に近年では、大学以外でもベラルーシ語を学ぶ取り組みが実施されている。具体的には、2013年7月に東京でベラルーシ人と日本人の有志が一般向けの無料ベラルーシ語講座「Беларуская かたりば・らずもーば」を開講した。同講座の創立メンバーとなったのは、タッチャナ・ツァゲルニク氏(日本研究を専攻する上智大学大学院生[当時])、アレーナ・フリツェンカ氏(日本ベラルーシ人会代表)である。その後、講師役を務めていたツァゲルニク氏が帰国したことに伴い、清沢が同講座のオーガナイザー役を引き継いだ。2016年からは柴田賢氏と不定期ながら共同で運営している。同講座は、開講当初はしんじゅく多文化共生プラザ(新宿区)にて開催していたが、2016年からは筑波大学東京キャンパス(文京区)を会場として利用している。ベラルーシ語講座にはロシア語既習者を中心に様々な年代の社会人が毎回10名ほど参加している。参考までに、2016年の前期講座の授業内容を以下の表2に示す<sup>25</sup>。

表2 社会人向けのベラルーシ語講座の内容

回	日程	各回の授業内容
1	4月16日	ベラルーシ、ベラルーシ語の紹介 1課:文字と発音(1)、日常表現(あいさつ)
2	4月23日	2課:文字と発音(2)、日常表現(調子をたずねる)
3	4月30日	3課:文字と発音(3)、日常表現(知り合いになる)
4	5月14日	4課:文字と発音(4)、日常表現(呼びかけ)
5	5月21日	5課:名詞の性・数、平叙文と疑問文
6	5月28日	6課:人称代名詞、動詞の現在形(1)
7	6月34日	7課:動詞の現在形(2)、肯定文と否定文
8	6月18日	8課:動詞の現在形(3)、「～したい」「～できる」の表現
9	6月25日	9課:動詞の現在形(4)、「～するのが好き」の表現
10	7月16日	10課:形容詞の性・数、所有代名詞
11	7月23日	11課:名詞の対格、所有表現
12	7月30日	12課:形容詞の対格、動詞の過去形 ベラルーシの食文化(打ち上げ@ミンスクの台所)

<sup>25</sup> また、実際の講座での活動の様子は本講座のブログ(<http://belmova-tokyo.hatenablog.com/>)及びFacebook ページ(<https://www.facebook.com/Belmova.Tokyo>)でも紹介しているので適宜参照いただければ幸いである。

## 6. おわりに

これまで見てきたように日本におけるベラルーシ語やベラルーシ文学への関心は既に戦前より存在していたことが確認でき、1991年のソ連邦崩壊及びベラルーシ共和国独立以降、そして近年になって特に高まりつつあるように思われる。ただし、大学における外国語としてのベラルーシ語学習について考えると、英語を第一外国語として学び、更にその他の世界的に話者人口の多い外国語(独・仏・中・韓・露・西語)を第二外国語として学ぶとことがすでに事実上ほぼ一般化している日本において、ベラルーシ語は日本人にとってはいわば第三外国語という位置づけにすぎない。その学習状況は、現状では選択的・限定的かつ極めて小規模なものに留まっている。学習動機も、仕事や研究活動での実践的な使用を目指すというよりは、多くの場合、ベラルーシやベラルーシの言語文化への純粋な知的好奇心に置かれている。

他方、ベラルーシ人にとっては、日本人の中でのベラルーシ語やベラルーシ文学への関心の高まりは、自身の言語文化への再評価を促す大きな社会的インパクトを持つ要因として作用している。これは、現在ベラルーシ語自体が、ベラルーシ人自身の間でも(特に都市部では)ほとんど日常的に使用されなくなりつつある一種の危機言語であるという社会言語学的な状況と密接に関連している<sup>26</sup>。

ベラルーシ語のような所謂マイノリティー言語と認識される第三外国語の学習は、日本においては第二外国語の学習以上に趣味や教養を目的としているイメージが強く、その意義が見いだされにくい。しかしながら、第三外国語はその学習自体が、第一外国語や第二外国語とは比べものにならないほど、当該言語が用いられている社会の人々から大きな関心と注目を集め、時として賞賛と敬意を受ける対象となる。筆者らが日本人向けのベラルーシ語教材を刊行したことをベラルーシ国内の様々なメディアが全国ネットを通じて大々的にかつ極めて好意的にニュース報道したことは、そのことを雄弁に物語っていると言える。少々大げさかもしれないが、第三外国語の学習は学習者自身が単純に教養を深めて、さらに知見を広げるという一方向的な活動に留まらず、両国家間、両国民間の双方向的な信頼醸成にも大いに貢献しうる側面があると言えるのではないだろうか。

その意味でも、第一外国語や第二外国語の学習のみならず、第三外国語の学習(世

---

<sup>26</sup> 詳細については、清沢(2012)を参照。

界のマイノリティー言語の学習)についてもその社会的意義を再認識し、これからの日本社会における多言語・複言語教育の潜在的可能性をについてマイノリティー言語の教育をも視野に入れた議論をもっと活発に行っていく必要があるのではないかと思われる。

(清沢・白山:筑波大学、ラムザ:ベラルーシ国立大学)

付記

本稿は、2016年5月にミンスク(ベラルーシ共和国)で開催された第1回国際ベラルーシ文化学会議での報告(Усуяма Тасінобу, Рамза Таццяна, Кіёсава Сіёры. Беларуская мова і літаратура ў культурнай прасторы Японіі / Першы міжнародны навуковы кангрэс беларускай культуры : зборнік матэрыялаў (Мінск, Беларусь, 5 – 6 мая 2016 г.). – Мінск : Права і эканоміка, 2016, С. 32-35.)を和訳した上で、加筆・修正し、発展させたものである。

また本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金「特別研究員奨励費、研究課題名:ベラルーシ共和国における言語状況及び言語政策に関する総合的研究、課題番号:263843」の研究成果の一部である。

なお、本稿の執筆にあたっては黒田龍之助氏より東京外国語大学でご自身が担当されたベラルーシ語の講義などについて多くの貴重な情報や資料を提供していただいた。ここに記して厚く御礼・感謝申し上げます。

## 参考文献

- Багдановіч М., Сібата К.(пераклад) 皐月の歌 (Маёвая песня) / Роднае слова – Мінск, 2016. – № 9. – С.14.
- Багдановіч М., Сібата К.(пераклад) 明星が天に昇って... (“Зорка Венера ўзышла над зямлёю...”(Раманс)) / Роднае слова – Мінск, 2016. – № 9. – С.11.
- Кіёсава, С. Переводы беларускай літаратуры на японскі язык / Мова – Літаратура – Культура: зб. навук. арт. VII Міжнар. навук. канф., прысвеч. 130-годдзю з дня нараджэння Янкі Купалы і Якуба Коласа, 27–28 верас. 2012 г., Мінск. – Мінск: Выд. цэнтр БДУ, 2012. – С. 384–389.
- Кіёсава, С. Вывучэнне беларускай мовы ў Японіі: праблемы і перспектывы // VI Міжнародны кангрэс беларусістаў. – Мінск, 2016. (у друку)
- Купала Я., Кітамікада Дз.(пераклад) 何者だ、そこに行くのは? (А хто там ідзе?) / А хто там ідзе?: На мовах свету. – Мінск: Мастацкая літаратура, 1983. – С.141
- Куроода, Р. Беларусь вачыма японцаў (спроба гістарычнага агляду) // Кантакты і дыялогі. – 1995. – № 0. – С. 11–13; перадрук: Беларусь. Расія. Японія : Матэрыялы Першых Астрав. краязн. чытаньняў, прысвеч. памяці І.Гашкевіча / [рэд. А. Мальдзіс і інш.]. – С. 93–97. – (Беларусіка = Albaruthenica ; Кн. 8).

- Мячкоўская, Н. Б. Японскі падручнік беларускай мовы // Культура. – 1999. – 30 студз. – 5 лютага.; перадрук: Беларусь-Японія Беларусь-Японія: Матэрыялы другіх міжнар. чытаньняў, прысвеч. памяці І.Гашкевіча, Мінск – Астравец, 9-10 кастр. 2002 г. / [Уклад. Т.Пятровіч; Рэдкал.: А.Мальдзіс (гал. рэд.) і інш.]. – Мінск : Беларус. кнігазбор, 2003. – С. 217–128. – (Беларусіка = Albaruthenica ; 25) .
- Навойчык, П. Няўжо японцы будуць ведаць лепш беларускую мову, чым мы? // – Народная газета. – 1993. – 9 верасня. – С. 2.
- Усуяма, Т. Ад рэдактара // Рамза, Т.Р., Кіёсава, С. Спрабуйма! Азнаямляльна-пачатковы курс беларускай мовы для японцаў I / навук. рэд. Тасінобу Усуяма. – Цукуба: Цукубскі ўніверсітэт, 2016.
- Алкажыі-Крешыф(著), 村井隆之(訳) (1966)「青年の日から」ほか五篇(「青年の日から」「きみとぼく」「詩に一言する」他三篇)『ソヴェート文学』第 6 号, 理想社, 97-100 頁.
- Алкажыі-Крешыф(著), 村井隆之(訳) (1970)「最前線で」「私の証言」他四篇『ソヴェート文学』第 29 号, 理想社, 33-37 頁.
- Алкажыі-Крешыф(著), 赤松徳治(訳) (1977)「子孫との対話」『ソヴェート文学』第 61 号, 飯塚書店, 34-35 頁.
- Алеші-Адамовіч, Даниэль-Гларэнін(著), 中田甫(訳) (1982)「封鎖の書からの諸章」『ソヴェート文学』第 79 号, 群像社, 35-79 頁.
- Алеші-Адамовіч, Даниэль-Гларэнін(著), 宮下トモ子(訳)(1986)『ドキュメント 封鎖・飢餓・人間— 1941→1944 年のレニングラード』新時代社.
- Андрэй-Федарэнка(著), 越野剛(訳) (2011)「ブリヤハ」『時間はだれも待ってくれない: 21 世紀東欧 SF ファンタスティカ傑作集』東京創元社, 75-93 頁.
- 飯田規和(1979)「戦争の意味を問い直す珠玉の作品:ワシーリ・ブイコフ著・草鹿外吉訳『狼の群』」『文化評論』222 号, 新日本出版社, 210-211 頁.
- Иван-Шамьякин(著), 松本忠司(訳) (1969)「女教師の子供たち」『ソヴェート文学』第 26 号, 理想社, 88-102 頁.
- Вашири-Буйкоф(著), 宮川あき子(訳) (1965)「なぜわたしは戦争について書くのか」『ソヴェート文学』第 5 号, 理想社, 119-121 頁.
- Вашири-Буйкоф(著), 岡林菜穂(訳) (1985)「最後の手榴弾」『ソヴェート文学』第 93 号, 群像社, 78-95 頁.
- Вражмил-Караткевич(著), 越野剛(訳) (2007)「紺青と黄金の一日」『ポケットのなかの東欧文学:ルネッサンスから現代まで』成文社, 293-308 頁.
- 江川卓(1968)「ブイコフの力作『死者に痛みはない』」『現代ソビエト文学の世界』晶文社, 335-338 頁.
- Элена-Попова(著), 古澤晃(訳) (2007)「女流詩人の為に夫が必要です」『海外戯曲アンソロジー: 海外現代戯曲翻訳集(国際演劇交流セミナー記録)1』れんが書房新社,

- 99-142 頁.
- 大平陽一(1992)「白ロシア語」、『言語学大辞典 第3巻 世界言語編(下-1) む-ほ』三省堂, 118-123 頁.
- 尾瀬敬止(1949)「白ロシアの文學」、『ソヴェート文學史』三一書房, 347-351 頁.
- 木岡文雄(訳) (1932)「白ロシアの文學」、『サヴェート文化叢書第1輯』木星社書院, 141-149 頁.
- 清沢紫織(2012)「ベラルーシ語はなぜ危機言語なのか：国勢調査にみるベラルーシ共和国の言語状況」日本スラヴ人文学会『スラヴィアーナ』第4号, 69-89 頁.
- 黒田龍之助(1997)「日本人の見たベラルーシ：歴史的概観の試み」、『言語文化論叢』第1巻, 東京工業大学外国語研究教育センター, 41-48 頁.
- 黒田龍之助(1998)『ベラルーシ語基礎 1500 語』大学書林.
- 佐藤純一(1993)「ベラルーシ語」、『世界のことば小事典』大修館書店, 406-409 頁.
- 佐藤純一(2004)「ベラルーシ語」、『新版ロシアを知る事典』平凡社, 676 頁.
- 佐藤純一(2009)「ベラルーシ語」、『事典世界のことば 141』大修館書店, 354-357 頁.
- 佐藤純一(2010)「ベラルーシのことばと文化」、『ロシア・中欧・バルカン世界のことばと文化』成文堂, 57-71 頁.
- シャミヤーキン(著), 箕浦達二(訳) (1982)「パン」、『ソヴェート文学』第82号, 群像社, 77-99 頁.
- スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチ(著), 三浦みどり(訳) (1995)『アフガン帰還兵の証言：封印された真実』日本経済新聞社.
- スベトラナ・アレクシエービッチ(著), 松本妙子(訳) (1998)『チェルノブイリの祈り』岩波書店 (岩波書店, 2011).
- スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチ(著), 三浦みどり(訳) (2000)『ボタン穴から見た戦争：白ロシアの子供たちの証言』群像社 (岩波書店, 2016) .
- スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ (著), 松本妙子(訳) (2005)『死に魅入られた人びと一連崩壊と自殺者の記録』群像社.
- スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチ(著), 三浦みどり(訳) (2008)『戦争は女の顔をしていない』群像社 (岩波書店, 2016).
- セヴェリン, トリフォノフ(共著), ロシア問題研究所(訳) (1934)「第三章 白ロシア文學」、『現代ソヴェト文学概論』ナウカ社, 303-311 頁.
- タッチャーナ・ラムザ, 清沢紫織(著), 白山利信(監修) (2016)『Спрабуйма! : 日本人のためのベラルーシ語入門 I』筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター.
- 東スラヴ諸語比較対照研究班(1996)『東スラヴ諸語対照文法研究第2巻：現代ベラルーシ語対照文法』(『神戸市外国語大学外国語研究』33).
- ブイコフ(著), 水野忠夫(訳) (1967)「死者に痛みはない」、『新しいソヴィエトの文学』勁草書

房.

- ペトルーシ・ブロフカ(著), 稲田定雄(訳) (1977)「奇しき橋」『ソヴェート文学』第 61 号, 飯塚書店, 25-26 頁.
- マクシム・タンク(著), 村井隆之(訳) (1966)「抒情詩八篇」(「古い家のガラス」「ああ、お前の返事は」他六篇)『ソヴェート文学』第 10 号, 理想社, 79-83 頁.
- マクシム・タンク(著), 稲田定雄(訳) (1975)「忘れないでおくれ」『ソヴェート文学』第 51 号, 飯塚書店, 138 頁.
- マクシム・タンク(著), 村井隆之(訳) (1979)「詩十一篇」(「旅の前」「わが町の舗装道路の石」「チリーの白樺」他八篇)『ソヴェート文学』第 68 号, 飯塚書店, 138 頁.
- 三谷恵子(2011)「ベラルーシ語」, 三谷恵子『スラヴ語入門』三省堂, 81-86 頁.
- ミハシ・リーニコフ(著), 春田国男(訳) (1969)「エウセイぢいさんとパラシカ」『ソヴェート文学』第 26 号, 理想社, 75-80 頁.
- ヤンカ・クパーラ(著), 除村吉太郎(訳) (1952)「あそこに行くのは誰か」『ソヴェート文学史 III』岩波書店, 920-921 頁.
- ヤンカ・ブルイリ(著), 佐藤貞雄(訳) (1969)「人気なき夜半に」『ソヴェート文学』第 26 号, 理想社, 81-87 頁.
- 除村吉太郎(1952)「白ロシアの詩人ヤンカ・クパーラ」『ソヴェート文学史 III』岩波書店, 917-925 頁.
- ラーザリ・ラーザレフ(著), 山野翠(訳) (1978)「偉大なるアカデミー-生活:ワシーリ・ブイコフのインタビュー」『ソヴェート文学』第 63 号, 飯塚書店, 129-144 頁.
- ラーザリ・ラーザレフ(著), 草鹿外吉(訳) (1985)「人間性の尺度:ブイコフの人と作品」『ソヴェート文学』第 93 号, 群像社, 157-163 頁.
- リホール・バラドゥーリン(著), 越野剛(訳) (2007)「クストウイ」『風に祈りを:リホール・バラドゥーリン詩集』春風社, 9-132 頁.
- リホール・バラドゥーリン(著), 越野剛(訳) (2007)「在れ!」『風に祈りを:リホール・バラドゥーリン詩集』春風社, 133-160 頁.
- ワシーリ・ブイコフ(著), 御子柴道夫(訳) (1969)「湖で」『ソヴェート文学』第 26 号, 理想社, 103-107 頁.
- ワシーリ・ブイコフ(著), 酒枝英志(訳) (1975)「敵との一夜」『ソヴェート文学』第 54 号, 飯塚書店, 32-59 頁.
- ワシーリ・ブイコフ(著), 草鹿外吉(訳) (1978a)「狼の群」『ソヴェート文学』第 63 号, 飯塚書店, 14-148 頁.
- ワシーリ・ブイコフ(著), 草鹿外吉(訳) (1978b)「狼の群」『ソヴェート文学』第 64 号, 飯塚書店, 14-103 頁.
- ワシーリ・ブイコフ(著), 草鹿外吉(訳) (1979)『狼の群』青磁社.

## 関連報道

- “Издана книга для изучения белорусского языка японцами”(日本人向けベラルーシ語学習書が出版される), 国営ベルタ通信, 2016/04/04 付(<http://www.belta.by/society/view/izdana-kniga-dlja-izuchenija-belorusskogo-jazyka-japontsami-188227-2016> [accessed 26 December 2016])
- “Выпушчаны дапаможнік па беларускай мове для японцаў”(日本人のためのベラルーシ語参考書が出版される), Звязда 紙(オンライン版), 2016/04/05 付(<http://zviazda.by/be/news/20160404/1459789810-samavuchycel-belaruskaj-movy-dlya-yaponcau> [accessed 26 December 2016])
- “Ад Мінска да Цукубы”(ミンスクからつくばまで), Літаратура і мацтацтва 紙(オンライン版), 2016/05/13 付(<http://www.main.lim.by/?p=5927>, 2016/12/26 閲覧)
- “Спрабуйма!”(トライしてみましよう!), Настаўніцкая газета 紙(オンライン版), 2016/11/04 付(<http://nastgaz.by/?p=26099> [accessed 26 December 2016])
- “Падручнік для сяброў”(友人たちのための教科書), Беларусь сегодня 紙(オンライン版), 2016/07/05 付([http://www.sb.by/by-belarus-magazine/kultura\\_bel/article/padruchn-k-dlya-syabro.html](http://www.sb.by/by-belarus-magazine/kultura_bel/article/padruchn-k-dlya-syabro.html) [accessed 26 December 2016])
- “Японцы загавораць па-беларуску”(日本人がベラルーシ語を話し始める), ベラルーシ 1 (オンライン版), 2016/04/07 付([http://www.tvr.by/bel/news/kultura/yapontsy\\_zagovoryat\\_po\\_belorusski](http://www.tvr.by/bel/news/kultura/yapontsy_zagovoryat_po_belorusski) [accessed 26 December 2016])
- “«Спрабуйма!»: БГУ и японский университет совместно выпустили книгу для изучения белорусского языка”(«Спрабуйма!»:ベラルーシ国立大学が日本の大学と共同でベラルーシ語教材を出版), СТВ(オンライン版),2016/04/06 付(<http://www.ctv.by/sprabuyma-bgu-i-yaponskiy-universitet-sovmestno-vypustili-knigu-dlya-izucheniya-belorusskogo-yazyka> [accessed 26 December 2016])
- “«Спрабуйма!» — першы курс беларускай мовы для японцаў”(«Спрабуйма!»:日本人のためのベラルーシ語初級コース),ベラルーシ語版ラジオ・リバティエー, 2016/03/08 付(<http://www.svaboda.org/a/27598875.html>[accessed 26 December 2016])
- “«Спрабуйма!» — у Японіі выйшаў пачатковы курс беларускай мовы для японцаў”(«Спрабуйма!»:日本人のためのベラルーシ語初級コースが日本で出版される), Наша Ніва 紙(オンライン版), 2016/03/08 付 (<http://nn.by/?c=ar&i=166361> [accessed 26 December 2016])
- “У Японіі ўпершыню выдалі падручнік беларускай мовы”(日本で初めてベラルーシ語教科書が出版される), 衛星 TV チャンネル Belsat (オンライン版), 2016/03/08 付(<http://belsat.eu/news/u-yaponii-upershynyu-vydali-padruchnik-belaruskaj-movy> [accessed 26 December 2016])
- “Упершыню выпушчаны дапаможнік па вывучэнні беларускай мовы для японцаў”

(日本で初めて日本人のためのベラルーシ語教科書が出版される), ニュースサイト  
Беларан, 2016/04/04 付 ([http://by.belapan.by/archive/2016/04/04/838766\\_838767](http://by.belapan.by/archive/2016/04/04/838766_838767)  
[accessed 26 December 2016])

“Преподаватели БГУ и Цукубского университета выпустили учебник мовы для  
японцев” (ベラルーシ国立大学と筑波大学の教員によりベラルーシ語教科書が刊行  
される), 2016/04/04 付, ニュースサイト TUT.by ([https://news.tut.by/society/  
491155.html](https://news.tut.by/society/491155.html) [accessed 26 December 2016])



Belarusian Language in Japan:  
A Case of Translated Belarusian Literature and Reference Books  
on Belarusian Language Education

Shiori KIYOSAWA, Toshinobu USUYAMA, Tatyana RAMZA

Following the collapse of the Soviet Union in December 1991, the Republic of Belarus gained its independence. Since then Japanese literature scholars and linguists have been showing a growing interest towards the new country's language and culture. Namely, direct translation of literature written in Belarusian into Japanese (instead of translating from Russian) and introduction of Belarusian language education into universities is taking place. This study analyzes the recent situation related to Belarusian literature and language in Japan.